

クラブライフの提案

「みやび倶楽部」

目次

那須高原の「大正ロマン」嗜好

1: キャンペーン「大正ロマン」

1-1 そもそも大正ロマンとは

1-2 「みやびの里」の大正ロマン

2: 明治維新前夜の那須郡 旧石高帳から

2-1 「みやびの里」敷地の江戸末期支配者

2-2 那須野が原の那須疎水

2-3 * 資料 栃木県の行政区域・那須郡の合併の足跡

2-4 資料 旧高旧領石高帳から現・那須町に属する旧石高一覧

3: 那須野が原に農業革命を

3-1 未開拓の山林原野・那須野が原に注目

3-2 資料 話題1 泰西(ヨーロッパ)流「大農論」をめぐる井上 vs 品川

3-3 資料 話題2 那須野が原の華族農場

3-4 伝統的な農村と異なる近代的な農場景観

3-5 華族農場の帰結

3-6 資料 4 つに分類した 16 の華族農場

3-7 農場経営に成功した青木周三の背景

3-9: 青木周三略歴

大正帝と華族の寄与

4: 那須と大正趣味

4-1 華族牧場の別荘と塩原御用邸

4-2 詰め込みから健康第一

4-3 建築土木・地域開発の三島通庸

4-4 品川弥二郎も那須と大正の接点に寄与

4-5 田母沢・塩原・那須

4-6 ドイツ好み

5: 華族牧場への現代的評価 日本遺産(Japan Heritage)の認定理由

5-1 荒野の開拓に挑んだ貴族

5-2 「人の住めない荒野」は避暑地として使えるようにした功績

5-3 資料 旧那須郡の石高の少ない順に村名を表示

5-4 話題 1927 年前後の「近光荘」開発 リゾート那須高原のはじまり

【那須高原の「大正ロマン」嗜好】

1: キャンペーン「大正ロマン」

1-1 そもそも大正ロマンとは

大正時代に芽生えた文芸思想や文化事象という。その典型が「ロマン主義」。英: Romanticism、仏: Romantisme、独: Romantik、…。片仮名ロマンチックは独語読み、ロマンチズムは仏語読みらしい。合理性から感受性に、理性から感性に、思考の軸を移動させて、物事をとらえようとする。たとえば恋愛の礼賛、自分らしい生き方への固執、夏目漱石は「浪漫」と訳した。

欧州での発祥は 1800 年とすれば、100 年経過して日本に芽生えた。華族牧場が定着し御用邸が設置された那須高原、すなわち那須町を含む 旧・那須郡ないし旧・那須国の、ふつうの生活が成り立たない、非居住区域に、このロマン主義の「ライフスタイル」が降誕した。当時の庶民の生活とは無縁だが、それから 100 年たった 21 世に初頭に、観光誘客目的にせよ、那須高原で「大正ロマン」がキャンペーンされた。現地のある事情通は、「それは塩原の話 だ」と、那須は関係ない旨のとコメントをされた。

1-2 「みやびの里」の大正ロマン

みやびの里はこの大正ロマンにこだわる。「豊かな自然と調和し、華やかな時代の雰囲気と気品ある落ち着きをまとった大正ロマンの湯宿で過ごす」という。すでにふれたように、「みやびの里」の事業主体の「日本ハウス」、さらにはその前身の「東日本ハウス」は、原敬の「介寿荘」との関係で、「大正ロマン」に縁を持っていた。原敬は大正デモクラシーを表象する典型的な総理大臣で、その別邸が介寿荘であり、戦後、東日本ハウスの創業者が買収して、料亭を経営していた。つまり、観光目的の塩原流「大正ロマン」に影響されたわけではない。偶然にそうなったと推察される。

むろん、ここで、普通選挙運動とか結社の自由・労働争議の自由などに立ち入るつもりはない。日清・日露に勝って、遅ればせながら帝国主義を標榜、「五大国」なみ軍勢力を常備し、第一次世界大戦に勝利した。それなりに量産・量販時代に入り、高度成長が続き資本主義が形を成してきた。いいところだけ取り出してみれば、感性重視を許容するゆとりができたということであろう。その頃の一部の階層に属する人々のライフスタイルの一断面を、いま風にアレンジして、「みやびの里」で再現させようとした。これが「大正ロマンの湯宿」にほかならないと推察した。

2: 明治維新前夜の那須郡…旧石高帳から。

2-1 「みやびの里」敷地の江戸末期支配者

「みやびの里」のある那須町は、旧下野(しもつけ)国那須郡に属する。現・栃木県はこの下野国および上野国の一部(熊谷市東隣接域)で構成された。

「みやびの里」のある高久村のあたりは黒羽藩(くろばねはん)領分であった。黒羽藩は 2 万石程度の小藩で、城がなく陣屋(大田原市前田 1014)が置かれた。今は案内板だけで、跡地に市立体育館がある。

幕末、15 代大関増裕は、海軍奉行、若年寄格を歴任し、地元では作新館を開校、スパンサー銃により洋式陸軍を編成したが、銃の暴発で 1868 年に 30 歳で死亡した。16 代増勤は戊辰戦争で官軍に参加、会津戦役で功あり永世賞典禄を受ける。後、米留学、子爵。小藩ながら結果的に時代の流れをよく見抜いていた。

江戸末期の下野国は 76.5 万石。そのうち旧・那須郡は約 9 万石。そして現・那須町に相当する 139 か村の合計が 1.7 万石。「みやびの里」の所在地を示す字は高久丙。それを含む高久村は 1,049 石。いまの地名から推察するに高久村はかなり広く、また平野の部分も多い。「みやびの里」から 7 キロほど北に登ると那須温泉神社のある湯本になる。湯本村は 22 石。さすがに耕地は少なかったのであろう。ひと口に那須野が原というけれども、茶臼岳に近づけば耕地も少なく、米は取れなかったのだが、すそ野の平野部は相応に米の収穫はあったことになる。

2-2 那須野が原の那須疎水

たしかに江戸時代から墓沼(ひきぬま)用水(接骨木堀(にわとこぼり)ともいう)があったが、飲用程度で灌漑には使うほどの水量はなかった。慶長年間(1596～1615 年)で墓沼・折戸・上横林・横林・接骨木の各村に用いられたという。



図 56 乃木神社・境内



図 57 墓沼用取・乃木神社前

用水は天明・明和の時代(1780 年代)に大田原藩が延長し大田原城下まで延長(大田原用水)されるが、しかし江戸末期の石高は、接骨木村 218 石、横林村 27 石、上横林村 96 石、折戸村 31 石、墓沼村 77 石にすぎない。後に箒根(ほうきね)村(現・那須塩原市)に合併される小さな村であったのだろうが、先の高久村に劣る。

那須野が原に本格的な那須疎水ができるのは、1885 年(明治 18 年)に、「県令三島通庸や農場経営を目指した矢板武、印南文作などの地元有志により、約 5 ヶ月という短期間に本幹部が開削された」とのことから、江戸時代の末期は「水不足に苦しめられる不毛の荒野」であったと推察されるが、石高帳を見る限り、そう簡単に括れるものではなさそうだ。

2-3 資料 栃木県の行政区域・那須郡の合併の足跡

現栃木県は、旧宇都宮県、県庁は河内郡宇都宮、管轄は下野国のうち 河内郡、塩谷郡、那須郡、芳賀郡、および旧栃木県、県庁所在地は都賀郡栃木、管轄は下野国のうち都賀郡、寒川郡、安蘇郡、足利郡、梁田郡、および上野国のうち山田郡、新田郡、邑楽郡、すなわち旧熊谷県の東半分からなる。

また、那須塩原市と那須町の施政区域の変遷は以下の通りである。

表1 現那須塩原市を構成する江戸末期の村名

旧町村名。	(注)。	旧市町名。
東那須野村。	東小屋村・山中新田村・三本木村・沼野田和村・木曾畑中村・下中野村・上中野村・島方村・大原間村・上大塚新田村・沓掛村・上厚崎村・下厚崎村・前弥六村・北弥六村・笹沼村・上郷屋村・波立村・中内村・無栗屋村・塩野崎村・鹿野崎村・唐杉村・北和田村・黒磯村・小結村・烏野目村。	旧黒磯市。
鍋掛村。	鍋掛村・越堀村・寺子村。	
高林村。	高林村・百村・洞島村・箕輪村・亀山村・岩崎村・細竹村・箭坪村・油井村・板室村・木綿畑村・嶋内村・湯宮村。	
狩野村。	三島村・石林村・南郷屋村・東関根村・西富山村・東遅沢村・西遅沢村・槻沢村・高柳村・井口村・関根村。	旧西那須野町。
西那須野村。	那須野村。	
塩原村。	下塩原村・中塩原村・上塩原村・湯本塩原村。	旧塩原町。
常根村。	関谷村・遅野沢村・墓沼村・折戸村・上横林村・横林村・接骨木村・高阿津村・上大員村・下大員村・宇都野村・下田野村・金沢村。	
那須村。	高久村・大島村・漆塚村・湯本村・豊原村の一部・寺子村の一部。	那須町。
伊王野村。	伊王野村・稲沢村・築瀬村・沼野井村・睦家村・東岩崎村・大和須村・梓村・大畑村・菱沢村。	
芦野村。	芦野宿・富岡村・寄居村・横岡村・豊原村の一部。	

(注)旧町村名は 1890 年現在。2 列目は明治維新前後の市町村制施行以前の状況。

出典:栃木県

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/a02/pref/shichouson/sonota/1177371692609.html>

3 : 那須野が原に農業革命を

3-1 未開拓の山林原野・那須野が原に注目

明治維新の殖産振興で、未開拓の山林原野が注目される。旧那須野が原は日本有数の扇状地だが、火山と伏流水が災いしてか、米が豊かにとれるとは限らなかった。疎水の開発は重要な解決策のひとつである。疎水が引けたら、おのずと生産性が高くなる地域もあった。むろん那須野が原全域の生産性が上がるという単純な問題でもないけれども、旧・那須郡の実高 9 万石の米収は、やりようでも、さらなる収穫が期待できると考えた。

そのやりようとは、泰西（ヨーロッパ）流「大農論」であった。ここからは、那須高原というより、那須野が原の話題、要は、旧高旧領取調帳データベースに掲載されない地域の話になる。

参考までに我流で調べてことを、別途に掲載した。

2-4 資料 旧高旧領石高帳から現・那須町に属する旧石高一覧

表 2 現・那須町に属する旧村石高

番号	旧国名	旧郡名	旧村名	旧領名	旧県名	旧高1	コード
1	下野国	那須郡	湯津上村	山内源七郎支配所	日光県	210	9407
2	下野国	那須郡	湯津上村	坂本久之丞知行	日光県	324	9407
3	下野国	那須郡	湯津上村	花房平左衛門知行	日光県	73	9407
4	下野国	那須郡	湯津上村	伊沢刀之助知行	日光県	269	9407
5	下野国	那須郡	狐島村	大田原藩領分	大田原県	168	9407
6	下野国	那須郡	小船渡村	酒井岩五郎知行	日光県	46	9407
7	下野国	那須郡	小船渡村	桑山并吉知行	日光県	46	9407
8	下野国	那須郡	小船渡村	菅橋三左衛門知行	日光県	46	9407
9	下野国	那須郡	狭原村	大田原藩領分	大田原県	631	9407
10	下野国	那須郡	野上村	黒羽藩領分	黒羽県	1,417	9407
11	下野国	那須郡	両郷村	山内源七郎支配所	日光県	444	9407
12	下野国	那須郡	木佐美村	黒羽藩領分	黒羽県	440	9407
13	下野国	那須郡	寺宿村	黒羽藩領分	黒羽県	452	9407
14	下野国	那須郡	大久保村	黒羽藩領分	黒羽県	590	9407
15	下野国	那須郡	久野又村	黒羽藩領分	黒羽県	569	9407
16	下野国	那須郡	中ノ内村	黒羽藩領分	黒羽県	853	9407
17	下野国	那須郡	河原村	黒羽藩領分	黒羽県	990	9407
18	下野国	那須郡	沼ノ井村	黒羽藩領分	黒羽県	222	9407
19	下野国	那須郡	稲沢村	黒羽藩領分	黒羽県	516	9407
20	下野国	那須郡	大島村	黒羽藩領分	黒羽県	327	9407
21	下野国	那須郡	漆塚村／ 落合村	芦野雄之助知行	日光県	237	9407
22	下野国	那須郡	高久村	黒羽藩領分	黒羽県	1,049	9407
23	下野国	那須郡	湯本村	黒羽藩領分	黒羽県	22	9407
24	下野国	那須郡	伊王野村	山内源七郎支配所	日光県	1,270	9407
25	下野国	那須郡	芦野宿	芦野雄之助知行	日光県	1,081	9407
26	下野国	那須郡	大畑村／ 寄石村	芦野雄之助知行	日光県	148	9407
27	下野国	那須郡	湯母村	芦野雄之助知行	日光県	28	9407
28	下野国	那須郡	大ヶ谷村	芦野雄之助知行	日光県	34	9407
29	下野国	那須郡	中梓村／ 下梓村／東 吉野目村	芦野雄之助知行	日光県	319	9407
30	下野国	那須郡	唐木田村 ／丸作村	芦野雄之助知行	日光県	231	9407
31	下野国	那須郡	芋淵村	芦野雄之助知行	日光県	46	9407
32	下野国	那須郡	塩阿久津 村／大久保 村／西吉野 目村	芦野雄之助知行	日光県	330	9407
33	下野国	那須郡	梁瀬村	黒羽藩領分	黒羽県	175	9407
34	下野国	那須郡	向宿村	黒羽藩領分	黒羽県	136	9407
35	下野国	那須郡	大和須村	黒羽藩領分	黒羽県	314	9407
36	下野国	那須郡	衰沢村	黒羽藩領分	黒羽県	540	9407
37	下野国	那須郡	岩崎村	黒羽藩領分	黒羽県	331	9407
38	下野国	那須郡	横岡村	黒羽藩領分	黒羽県	641	9407
39	下野国	那須郡	寄居村	黒羽藩領分	黒羽県	1,832	9407
						17,394	

(注) 旧高旧領取調帳データベース@国立歴史民俗学博物館から検索。

出典：https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/kyud/db_param

3-2 話題1: 泰西(ヨーロッパ)流「大農論」をめぐる井上 vs 品川

当時の貧しい食生活を解決するには、日本の農業の改革が維新後の重要課題になった。泰西流農法(ドイツや北欧に見られる大規模農業)を紹介した井上馨の「大農論」があり、他方で、泰西のままではムリだから日本版を探るとした品川弥二郎の「農業論」があった。ともに長州出身の維新第一世代の志士で、早期にドイツをはじめ西欧(当時の漢字だと泰西)に視察・留学し、明治政府の要職にあった。だが、長州藩の旧士族としては、井上の身分が品川よりはるかに上にあった。井上の本務は外交で外務卿・外務大臣(明治12～20(1879～87)年)。品川は農商務大輔(明治15～18(1882～1885)年)で、現在の「系統農協」の創始者である。

荒幡克己(岐阜大)の説によれば、井上も泰西大農がそのまま維新後の日本に根付くとは考えていなかったという。農商務大臣に就任するまえの宮 中顧問官(1888(明治 21)年)の頃、閑職であったためか農業振興の調査を進め、地方に出ては老農(≡富農)を集め、「大農論」を説いた。

自宅から離れたところに、小さな農地を散在させておくのは、時間の無駄になるし、あぜ道の分だけ収穫できないので、農地を交換し合って、あぜ道を少なくし、広い耕地にすべきというような論旨(交換分合)であって、必ずしもそれは泰西流の大規模を説いたのではないという。宮城県の県令はその論旨に賛同し、さっそく条例を設けて実施したけれども、平坦な農地ばかりではない関西地方では、あぜ道を取ったら水位が低下し、耕地を喪失しかねないという難もあった。

反井上の急先鋒だった品川は、同じ 1888 年頃、…明治政府が招請した外国人専門家が、日本の実情を知らずして、ヨーロッパ諸国のやり方を適用しようとして、耕地を拡大して農業機械を導入する手法を推奨するのは、まことにこの国の運命を危うくするもとだ…というような論陣を張ったことから、井上の大農論も空論と評されたようだ。

井上自身が治外法権是正をめざし西欧文化の導入を急ぐ、鹿鳴館促進派の外交官であった。それゆえのナショナリズム的井上批判も加わった。ゆえに、大農論をまともにとらえた批判かどうかは疑わしい。本欄の紹介は上滑りなので、ご関心の向きは荒畑論文を参照いただきたい。

なお、品川は那須に投資をするが、那須野が原に井上の名前は出てこない。鬼門だったのであろうか。筆者の印象では、いずれにしてもほどほどに和魂洋才と映る。

出典：荒幡克己、「井上馨の「大農論」を巡って」『農業経済研究』、第 68 巻第 3 号、1996、145-153 頁。

3-3 資料 話題2:那須野が原の華族農場

以上のような大農論をよそに、那須野が原では、すでに 1881(明治 14)年、大山巖(薩摩・273 町歩)、西郷従道(薩摩・248 町歩)、青木周蔵(長門・1576 町歩)、佐野常民(佐賀・257 町歩)が用地を取得していた。ちなみに 1 町歩は 3000 坪。18H のゴルフコースには、その時代々の自治体の規制、ことに残地森林率などにもよるが、150 町歩くらいで開発可能になる。よって、その広さから推察するに、ただ 1 軒の別荘を設けるには いささか広すぎ持て余す。殖産振興に資するなんらかの開発用地であったに相違ない。

那須野が原にある文化財をみても、明治維新後の華族たちが、土地を取得し、農場経営を始めたことは、納得できよう。何も無かったに等しい原っぱに、どのように農村の集落ができ、農業が営まれたかもさることながら、この華族農場を、けしき、景観と理解しようと試みた。以下、椿真智子(東京学芸大)の論文をガイドにして、那須野が原の華族農場を追跡してみよう。

その大山らのあとに、1883(明治 16)年品川弥二郎(長門・239 町歩)、1884(同 17)年山縣有朋(長門・729 町歩)、1885(同 18)年毛利元敏(長門・1906 町歩)、1886(同 19)年三島通庸(薩摩・991 町歩)、1887(同 20)年戸田氏共(美濃・883 町歩)、松方正義(薩摩・1650 町歩)、佐々木高美(土佐・129 町歩)、大久保利和(薩摩・119 町歩)、1890(同 23)年山田顕義(長門・111 町歩)、1891(同 24)年渡辺千秋(諏訪・135 町歩)、1893(同 26)年鍋島直大(肥前・383 町歩)、1894(同 27)年渡辺国武(諏訪・100 町歩)とつづく。

出典：椿真智子「文化景観としての近代開拓農場—フロンティアにおけるモダニティの表象に関する一試論—」『学芸地理』54 号、1999、43-56 頁。

計 16 件の面積をランク付けすると、青木(1576 町歩)、毛利(1906 町歩)、松方(1650 町歩)が目立つ。毛利・青木は長州、松方は 薩摩である。16 件全体では、長州 5 件面積計 4,561 歩、薩摩 5 件面積計 3,281 町歩、以下肥前 2 件 640 町歩、美濃 1 件 883 町歩のように続く。

(注)18 ホールのゴルフ場用地は、規制次第で変わる。1 平方kmは 100 町歩であるが、古いコースでは 18H あたり 100 町歩程度で開発された例もあるようだ。

全体に長州好みの光景になりそうであるが、登場する人物のほぼ全員が外国での長期の出張・留学・勤務の経験がある。那須野が原に登場する華族・豪商たちは、おそらくは、それぞれ外国で経験した洋風の生活習慣を、それぞれなりに都合よく解釈し、和洋折衷の生活様式を取り入れたのであろうし、その周辺にいた者たちは、和洋折衷の生活様式に影響され、洋風に感化されていったと推定する。

3-4 伝統的な農村と異なる近代的な農場景観

しかしながら、単純に維新に遭遇しただけの旧士族や土着の一般住民は洋風どころではない。日常の衣食にさえ事欠く始末であった。明治期の那須野が原に存在した在来の農村はかなり窮乏していた。そういう意味でも、華族農場のあった那須野が原の当時の景観、樗の言う「伝統的な農村と異なる近代的な農場景観」は、他の空間に比べ、浮き上がっていた。

しかし、その浮き上がった分、21 世紀の日本人の好みに合う側面があり、それがいまの那須野が原の繁栄を招き、これからの可能性の源泉になる。日本ハウスの「みやびの里」も、大正時代を標榜しながら、そのような由来による今の那須野が原の景観の一端を提示している。

3-5 華族農場の帰結

表の景観とは少しく離れる裏の表情を眺めてみよう。用地を取得した華族たちは、農場の事業をどう推進するのか。つまりは、何を生産しどう販売するのか。その生産販売は誰が作業するのか。そもそも事業スキームはだれが考えるのか。山林・牧畜・耕地…何を事業化するのか。水利や道路(那須疎水 や灌漑用水および街道と取得した用地の位置関係)は重要だが、多少水利に恵まれたから耕地、ないから山林というものでもなかったようだ。

華族自ら事業者になるにふさわしい能力があれば直営も可能になる。直営が無理なら OEM 元になるか。OEM 先(委託者のブランドによる生産を受託する事業者)のような受け皿があれば、生産の委託も可能になる。それにしても、OEM 先を探し、条件を交渉するにもノウハウが要る。政府のお雇い外人はノウハウのエッセンスは提供するだろうが、現地の OEM 先との交渉まではしない。

土地の所有と事業を分離し、事業を推進できる専門家がいれば、従業員を時間で拘束する雇用関係を結び、賃金を提示して従業員を募集する。しかしそれもムリなら、地縁閥を構築して小作人を募集し、洋風化した景観のなかに、江戸時代の庄屋と小作人の関係を再現するようなことになる。

そうなれば、広大な用地に機械化で対応する泰西式大農とはなじまない感じもする。この辺は農業経済学者の領域だからこれ以上触れないが、雑駁に言えば、この華族農場(あるいは華族以外の農場も含め)、農場という事業はそう簡単に利益を生まなかったように推定する。

石高帳を見る限り、ひと口には言えないものが、廃藩置県で幕府や大名から取り上げたけれども、新政府からみた那須野が原は魅力なく、華族や豪商に下付し、相当な追加投資を期待したのであろう。

3-6 資料 4つに分類した16の華族農場

椿論文によれば、栃木の華族農場は16を数える。同調査に若干の項目加え、主観で数値化し、クラスター分析すると、4つのタイプ(下表4色で表示)に分類できた。

i	1 1881(明治14)年・大山藏(薩摩・273町歩)、
	4 1881(同14)年・佐野常民(肥前・257町歩)
	2 1881(同14)年・西郷従道(薩摩・248町歩)、
	5 1883(同16)年・品川弥二郎(長門・239町歩)、
	15 1893(同26)年・鍋島直大(肥前・383町歩)
ii	11 1887(同20)年・佐々木高行(土佐・129町歩)、
	14 1891(同24)年・渡辺千秋(露訪・135町歩)、
	12 1887(同20)年・大久保利和(薩摩・119町歩)、
	13 1890(同23)年・山田顯麿(長門・111町歩)、
	16 1894(同27)年・渡辺国武(露訪・100町歩)
iii	6 1884(同17)年・山形有朋(長門・729町歩)、
	8 1886(同19)年・三島通庸(薩摩・991町歩)、
	9 1887(同20)年・戸田氏共(美濃・883町歩)
iv	3 1881(同14)年・青木周蔵(長門・1576町歩)、
	10 1887(同20)年・松方正義(薩摩・1650町歩)、
	7 1885(同18)年・毛利元敏(長門・1906町歩)

図 58 華族農場のクラスター分析

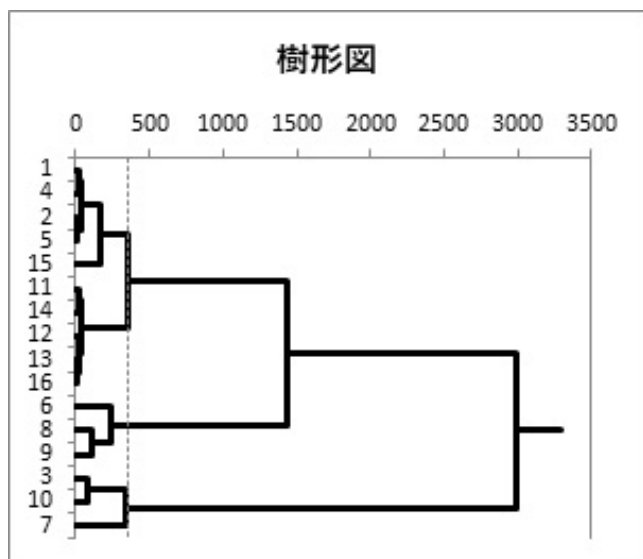


図 59 華族農場の樹形図

図 58 は、表 3(後掲)を適宜数値化したのちクラスター分析した。その結果、図 59 が樹形図である。iv グループがこの 16 農場のなかでは際立った特徴があることを示す。

3-7 農場経営に成功した青木周三の背景

このなかで、すくなくも、iv グループのなかの青木農場は経営の優等生だった。iv グループはなんといっても開発面積が大きい。3 者とも外国履歴に厚みがある。外交官ではあったが、青木周蔵は三浦團七であり、後の宮廷大典医となる青木研藏(毛利藩医、後・宮廷医)の養子になるが、その養家の夫人(青木テル)と離婚して、ドイツ人(エリザベート・フォン・ラーデ)と再婚しているほどだ。再婚した夫人は日本の生活様式にはなじまなかった。周蔵本人の人格や性格については種々評価が分かれるようだが、明治維新特有の官僚であった。



図 60 青木周蔵別邸案内板



図 61 青木周蔵別邸ダイニングルーム



図 62 青木周蔵別邸外観

華族ということなので位階勲等爵位が肝要だ。その点、松方が秀逸だが、毛利・青木はそれほどでもない。この毛利は長門国長府藩 14 代(最後 の)藩主ではあるものの、長州藩の支藩(5 万石)である。「中山忠光(明治天皇の叔父)が長府藩に亡命していたときに暗殺」というハンデがあるようだから、栄典にも限りがあるだろう。なお、那須野が原の農場用地の取得時期や面積と、試みに数値化した華族の栄典とは、有意な関係を見出せなかった。「実力主義」が作用しているのだろうか。

ただ、この用地を確保した年齢をみると、佐野や松方は 58 歳と 52 歳だが、毛利 36 歳・青木 37 歳。このとき青木はドイツ公使(在独公館の トップ、1906 年に大使館昇格)であった。前々任が品川弥二郎、前任が西園寺公望である。この時代のスピード昇進にはいまのキャリア官僚も羨望となろう。ちなみに戸田は 33 歳、大山・西

郷・品川は37～40歳であった。この時代では働き盛りだろうが、それにしても維新のエネルギーが垣間に見える。

青木の、本業は外交官で、以下のような略歴がある。藩から医学留学を命ぜられたのに、勝手に政治経済に変えたばかりか、在独の仲間にも専攻の変更を持ちかけるなど、問題を引き起こしただけあって、その外交履歴も多彩、懸案の不平等条約を改正していった。徹底したドイツ好みで、那須の別邸の随所に見受けることができる。70歳で没。贈正二位贈勲一等子爵。後任外相の陸奥宗光が53歳で没、正二位勲一等伯爵に比べるとやや見劣りするが、その分、那須野が原があるではないか・・・ということかもしれない。

3-8 資料 農場の所有者プロフィール抄

表3 農場の所有者プロフィール抄

	所有	維新	購入年	面積	購入時の職	出身	生年	爵位	外国履歴
1	大山	薩摩	14	273	陸軍卿	新貴族	1842	公爵	明治3年から6年間はジュネーヴに留学。ロシアの革命運動家レフ・メーチニコフと知り合う。
2	西郷	薩摩	14	248	陸軍卿	新貴族	1843	侯爵	明治2年山縣有朋と共に渡欧。軍制を調査。明治3年横浜に帰着。
3	青木	長州	14	1576	駐独公使	新貴族	1844	子爵	明治元年、藩留学生ドイツへ医学留学。政経に無断転科。5年北ドイツ留学生総代。6年に外務省。
4	佐野	肥前	14	257	大蔵卿	新貴族	1823	伯爵	明治前年パリ博。日進発主。西欧軍事・造船視察。元年帰国。6年ウィーン博派遣。
5	品川	長州	16	239	農商務大輔	新貴族	1843	子爵	明治3年(1870年)、渡欧普仏戦争視察。73年からドイツ公使館に勤務した。76年帰国。
6	山県	長州	17	729	内務卿	新貴族	1838	公爵	明治2年渡欧。仏英独など巡遊。3年に米経由帰国。
7	毛利	長州	18	1906	御用掛	旧大名	1849	子爵	明治4年岩倉使節団に同行、米留学。
8	三島	薩摩	19	991	警視總監	新貴族	1835	子爵	なし。
9	戸田	美濃	20	883	オーストリア＝ハンガリー全権公使	旧大名	1854	伯爵	明治4年米留学。明治12年帰国。15年伊藤博文に随って欧州。
10	松方	薩摩	20	1650	大蔵大臣	新貴族	1835	公爵	明治10年渡欧。フランスに滞在、蔵相レオン・セイ助言を得る。
11	佐々木	土佐	20	129	宮中顧問官	新貴族	1830	侯爵	明治4年岩倉使節団。明治6年帰国。
12	大久保	薩摩	20	119	大蔵省主計官	襲爵	1859	侯爵	明治4年岩倉使節団随員。普通学研修のため米フィラデルフィア中学入学。7年帰国。
13	山田	長州	23	111	司法大臣	新貴族	1844	伯爵	明治4年岩倉使節団。仏訪問時にナポレオン法典と出会い「法律は軍事に優先」。6年帰国。
14	渡辺1	諏訪	24	135	滋賀県知事	新貴族	1843	伯爵	なし。
15	鍋島	肥前	26	383	貴族院議員	旧大名	1846	侯爵	明治4年岩倉使節団として米留学、明治6年イギリスに留学。1878年に帰国。
16	渡辺2	諏訪	27	100	大蔵大臣	新貴族	1846	子爵	なし。京都隠棲時に英語、フランス語、ドイツ語を学ぶ。
		(注)	a	b	c	d		f	g

(注) a明治年。b単位町歩。c購入時官職。d出自。e最終の叙爵。

3-9: 青木周三略歴

表4 青木周蔵略歴

青木周蔵略歴
1844年(天保15年)生まれ 長州藩村医三浦玄仲の長男 幼名は三浦團七
1866年(慶応2年)青木研蔵の養子、士族、研蔵の娘テルと結婚明倫館・長崎で医学修行
1868年(明治元年)藩留学生ドイツ留学渡独後、医学から政治経済に転向
1872年(明治5年)北ドイツ留学生総代留学生らの専攻を一方的に分散させる
1873年(明治6年)外務省外務省一等書記官を経て本省に勤務
1874年(明治7年)駐独代理公使、さらに駐独公使となってドイツに赴任
1875年(明治8年)オーストリア＝ハンガリー帝国公使を兼任、
1876年(明治9年)エリザベートと結婚を決意
1877年(明治10年)外務省許可テルとの離婚が難航品川弥二郎らが助力
1878年(明治11年)オランダ公使も兼任
1879年(明治12年)妊娠中のエリザベートを連れて帰国条約改正取調御用係
1880年(明治13年)井上馨外務公卿の下で再度駐独公使、ベルリンに赴任、
1881年(明治14年)那須野が原に開発用地取得
1882年(明治15年)伊藤博文の在欧憲法調査ベルリン大学の憲法教授を紹介、
1885年(明治18年)ドイツ帝国 帝冠章綬装飾赤鷲第一等勲章
1885年(明治18年)オランダ、ノルウェー公使兼務
1886年(明治19年)従三位
1886年(明治19年)外務大輔条約改正議会議副委員長
1886年(明治19年)第1次伊藤内閣・外務大臣井上馨のもとで外務次官
1887年(明治20年)ポルトガル王国・キリスト勲章グランドクロア
1887年(明治20年)子爵
1887年(明治20年)条約改正会議に出席
1888年(明治21年)勲一等タイ王冠勲章
1888年(明治21年)黒田内閣・大隈重信外相のもとで外務次官
1889年(明治22年)大日本帝国憲法発布記念章
1889年(明治22年)外務次官・条約改正全権委員・条約改正交渉、
1889年(明治22年)枢密顧問官
1889年(明治22年)第1次山縣内閣外務大臣、対英条約改正交渉
1890年(明治23年)勲一等瑞宝章
1891年(明治24年)オスマン帝国 美治慈恵第一等勲章
1891年(明治24年)第1次松方内閣・外務大臣留任、領事裁判権撤廃の条約改正に奮闘
1892年(明治25年)駐独公使後任外相に陸奥宗光駐イギリス公使を兼任
1894年(明治27年)旭日大綬章
1894年(明治27年)駐英公使日英通商航海条約改正に成功
1895年(明治28年)甲級第一等聖ミハエル勲章 赤鷲大綬章 1等オスマニエ勲章(英語版)
1898年(明治31年)第2次山縣内閣・再び外務大臣に就任、
1900年(明治33年)義和団の乱に積極的な介入
1902年(明治35年)デンマーク王国 ダンネブロ勲章グランクロワール(Elisabeth von Rhade)
1904年(明治37年)ハナ、トラッヘンベルク伯爵(駐日ドイツ公使館主任外交官補)と東京で結婚
1906年(明治39年)駐米大使移民問題
1914年(大正3年)肺炎のため死去
1914年(大正3年)(没後叙勲)旭日桐花大綬章
1914年(大正3年)(没後追叙)正二位
2004年(平成16年)孫のヒサ、那須別邸を訪れ、ハナの写真などを寄贈